



# ピアノニストからみた室内楽入門

## 第6回 ピアノ・トリオの歴史

深井尚子 ● ピアニスト

今月は、ピアノ・トリオがどのよう  
に始まったかということについて  
お話したいと思います。ピアノ・ト  
リオを最初に書いたのは、ハイドン  
と言えるでしょう。彼は40曲を超え  
るピアノ三重奏曲を残しています。

当時は鍵盤楽器もチェンバロからフォ  
ルテピアノへの移行期でしたが、鍵  
盤楽器の活躍は盛んで、ヴァイオリ  
ンやチェロは添え物のように扱われ  
ることがほとんどでした。初期の中  
期のハイドンのピアノ・トリオはほ  
とんどピアノが主体で、ヴァイオリ  
ンはメロディーを担当することもあ  
りますが、チェロは通奏低音を担当  
するか、ピアノの伴奏部分のバス音  
と一緒に弾くという扱いでした。そ  
の当時から慣例がロマン派後期ま  
で残っており、ブラームスやシューマ  
ンの作品でも、ピアノ・トリオの名  
称は『ピアノとヴァイオリンとチェ

ロのためのトリオ』、また、モーツァ  
ルトの作品には『ヴァイオリンと  
チェロの伴奏付のピアノ・ソナタ』  
などと記されており、ピアノが主体  
である印象を持たれるような表現と  
なっています。

古典派の時代の作品は多くの場合  
3楽章形式で、演奏時間も15分程度

と比較的短く、終楽章にロンド形式  
や舞曲を取り入れ華やかに終わるよ  
うになっています。当時は、貴族の  
サロンなどで趣味程度に楽器を演奏  
する愛好家が多かったため、それら  
の音楽愛好家でも演奏できるよう技  
術的にあまり難しくない楽曲がたく  
さん作曲されました。ハイドン、モ  
ーツァルト、ベートーヴェン

は、たくさんのピアノ・トリ  
オを書いていきます。しかし、  
ベートーヴェンの中期から晩  
年にあたる19世紀前半は、古  
典派の形式主義が終わりを告  
げ、より自由な様式に変化し  
て行きました。そのため、ロ  
マン派の作品はソナタ形式だ  
けではないさまざまな様式を  
取り入れ、4楽章形式の長大  
で重厚なものになっています。  
また、ピアノの発展につい

ても見逃すことができません。ピ  
アノは、ベートーヴェン後期には現代  
の楽器の原型が確立したと言えるで  
しょう。ヴァイオリンやチェロにも重  
要な役割が与えられ、3つの楽器が  
有機的に混ざり合う、まさにアンサ  
ンブルとして作曲されたのは、ロマ  
ン派以降なのです。それらのロマ  
ン派の楽曲は、演奏会のプログラムの  
主役になる名曲が揃っています。

ピアノ三重奏曲は、ロシアにおい  
て「死者を追悼するため」に書かれ  
るといふ慣例があり、チャイコフス  
キーはニコライ・ルービンシュタイン  
の死を悼み《偉大な芸術家の思い出  
に》、ラフマニノフはチャイコフスキ  
の死を悼み《悲しみの三重奏曲第2  
番》などの作品を遺しています。

このような歴史を知ると、ピアノ・ト  
リオに対するアプローチが少し身近  
に感じられるのではないのでしょうか？



イラスト◎吉田しんこ



Shoko Fukai

ウィーン市立音楽院修了。ウィーン古典派  
をレパートリーの中心に演奏活動中。特  
にベートーヴェンを深く研究しており、学  
術論文多数。ベートーヴェンピアノ・ソナ  
タのCD第1集、第2集は好評発売中。  
色とりどりの小品集ハイドン、ベートーヴェ  
ン（ヤマハミュージックメディア）の校訂  
解説の楽譜も好評。現在、北海道教育  
大学音楽コース准教授。